

内田健三著

現代日本の保守政治



岩波新書

61



内田健三著

現代日本の保守政治

内田健三

1922年熊本県に生まれる

1953年東京大学法学部卒業

共同通信社に入り、政治記者となる、

政治部長、論説委員長を歴任

現在一法政大学教授、NHK解説委員

著書—「戦後日本の保守政治」(岩波新書)

「派閥」(講談社現代新書)

「参院比例代表制」(編著、有斐閣)

「税制改革をめぐる政治力学」(編者、

中央公論社) ほか

現代日本の保守政治

岩波新書(新赤版) 61

1989年3月20日 第1刷発行 ©

定価 480 円

著 者 うち だ けん ぞう
内 田 健 三

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-430061-4

目

次

序章	戦後政治から現代政治へ	1
----	-------------	---

第一章	佐藤長期政権の明暗	9
-----	-----------	---

1	外交——安保・沖縄・日中	13
2	経済——高度成長の光と影	26
3	党支配——主導権の確立と衰弱	34

第二章	一九七〇年代の混迷	43
-----	-----------	----

1	田中政権——「異才」の登場と没落	48
2	三木政権——非力の「切札」	58
3	福田政権——遅く来過ぎた政権	67
4	大平政権——非運の宰相	76

第三章	保守再建の模索	85
-----	---------	----

1	大平政権再論——八〇年代政治の原型	88
---	-------------------	----

2	鈴木政権(上)——「和の政治」の限界……………	98
3	鈴木政権(下)——「踊り場」的政権……………	108

第四章 一党支配の再構築……………117

1	中曽根政権(上)——「角影」の足かせ……………	119
2	中曽根政権(中)——行財政改革と外交……………	125
3	中曽根政権(下)——したたかな政治力……………	146
4	竹下政権の一年——「リクルート」に揺れて……………	152

第五章 現代保守政治の生態……………159

1	政治家の世代とルーツ……………	160
2	自民党議員の日常活動……………	166
3	政治家とカネ……………	173
4	政界歳時記……………	181

終章 政治に問われるもの……………

195

あとがき……………

207

事項索引

序章 戦後政治から現代政治へ

「繕いの政治」

一九八一年春、筆者が戦後最大の政治記者と敬服し私淑していた故後藤基夫さんは、こういう趣旨の予言をしていた。「戦後保守の繕いつくろの政治が続いている。

鈴木善幸政権はその最たるものだ。おそらくその次あたりから新しい政治が登場しよう」(後藤、内田健三、石川真澄の雑誌『世界』座談会。のち『戦後保守政治の軌跡』岩波書店、一九八二年刊)

この予言は的中した。八二年一月、中曽根康弘が戦後第一六代の首相、自民党第一一代の総裁として政権の座についた時、中曽根は「戦後政治の総決算をしたい」と言い放ったのである。明らかにそれは、「繕いの政治から攻めの政治へ」の転換、新展開を宣言したものであった。

戦後保守政治はいつ完成したか。筆者はそれを、佐藤栄作政権のときとみた。昭和二〇年代の吉田茂、鳩山一郎を源流とし、三〇年代から四〇年代半ばにかけての岸信介、池田勇人、佐藤栄作の三者によって堅固に構築された保守支配。ところが後藤さんは、この座談会で「戦後

保守政治は田中角栄まで」と規定している。しかしこの規定は、「田中が善悪ともに保守政治の極致である」(同書、後藤発言)ということを強調するための後藤さん独特の表現だったと筆者は思う。

たしかに田中は、よかれあしかれ戦後保守の集大成者であったが、同時に田中は、佐藤政権の末期にはころび始めた保守支配を獅子奮迅の勢いで繕おうとする手荒な繕い師でもあった。日中国交正常化、日本列島改造論、小選挙区制、通年国会の発想、そして金権支配に至るまで、さまざまな政策の成功と失敗、試行錯誤が、それを物語っている。そして、田中に始まる三木武夫、福田赳夫、大平正芳、鈴木善幸の歴代政権、つまり「三角大福鈴」の一〇年間は、まさに保守支配の繕いに明け暮れたのであった。

中曽根―竹下政権とは
では中曽根こそは新しい政治の創始者であるのか。戦後保守の繕いから一転して、攻めの現代保守政治を確立し得たのか。

実は大平が、その短い政権の末期にそのことを意識し始めていた。世界的にも、黄金の一九六〇年代、混迷の七〇年代が過ぎた八〇年代の入り口に立って、大平は世界の中の日本、そこでの新しい保守政治の進路を模索しようとした。しかし、その模索は八〇年六月の大平の急死によって挫折し、後継者の鈴木は、その政権二年四カ月を「踊り場」的政権として

空費した。そのあとに中曽根が、大平と共通すると同時に、かなり異質でもある、独自の歴史認識を持ち、戦後保守の超克を意図して登場したのである。

中曽根は、指導者のタイプが「陣頭指揮型」として田中になぞらえられる反面、「待ちの政治家」といわれた佐藤に類似すると指摘される複雑な政治資質を持つ。そのどぎつく華やかな政治手法、演技性に至っては、歴代の首相と隔絶している。しかもまた、大平の政治路線との一種の継続性が指摘されたりもする。それだけに、中曽根政治の総括、その歴史的位置付けは、一筋縄ではない課題である。

しかも、中曽根のあとを継承した竹下登政権は、これまた鈴木政権にやや似た「踊り場」的政権の性格を持ちながら、なかなかのしたたかさを秘めている。

中曽根政治は、戦後四〇年の政治に区切りをつけ、戦後を脱した新しい現代政治を創始したのか、それとも、鳴り物入りの五年間は一場の幕間劇、エピソードに過ぎなかったのか。筆者は本書において、現代日本の保守政治の位相を見きわめたいと思う。

二〇年前の問題意識

前著『戦後日本の保守政治』（岩波新書、一九六九年刊）において、筆者は戦後政治の構造を次のように要約した。

「戦後政治は、①自覚と自発性を増した国民大衆の政治意識、②それに適合するか

ぎりの革新勢力のエネルギー、③それらに巧みに、あるいはおろかに対応する保守政権の統治技術、という一種の三重構造によって組み立てられてきた……戦後政治の約二〇年をふり返ってみると、この保守・革新・国民大衆の三つの要素の緊張と緩和が織りなす起伏があざやかに読みとれる」

「日本国憲法が育てた戦後民主主義の精神はそれほど脆弱ではないし、平和・民主・人権を信奉する国民大衆の意識とエネルギーは定着しつつある。保守も革新も、この国民大衆の意識とエネルギーを尊重し体现することなしには、その存在を確保しその勢力を拡大することとはできない。革新の現状が分裂し拡散し弱体化していようと、それはやがて何らかの形で再結集・再統合の道を見いだすであろう。保守もまた現段階の優位を「保守独走への信任」と誤認して暴走するならば、国民大衆の手きびしい反撃と抵抗に直面するであろう」

こうした問題意識に立って、私は「戦後保守政治がたどった歩みを、安保・憲法・日中関係の問題を中心にして追い、その出発点と体質、内政・外交上の決定的瞬間における対応、その対応の巧拙、強圧と迂回、そして保守内部における本流と傍流の意味、などをえがきだすこと」を試みたのだった。

保守・革新
と国民大衆

それからまた二〇年の歳月が流れた。国際情勢とその中における日本の国際的地位、日本国内の経済と社会、国民の意識と生活、それらすべてが大きく変わった。しかし筆者は、二〇年後のいまも、この前著を執筆した時の基本的立脚点を大きく修正する必要はないと思っている。たしかにたとえば、筆者が前著の軸に据えた安保・憲法・日中の三本柱のうち、日米安保は日本の外交と安全保障の基軸として生き長らえている。その安保と対峙した憲法もまた、一面風化しながらも他面国民の血肉と化して、改憲の企図を拒み続けている。しかし日中はもはや、保守と革新を分ける指標としての存在を解消してしまった。何よりもその保守対革新という対置図式そのものが、政治勢力を分類し検討する物差しとしての役割をほとんど喪失してしまった。

それにもかかわらず、前著で指摘したように「日本国憲法が育てた戦後民主主義の精神はそれほど脆弱ではないし、平和・民主・人権を信奉する国民大衆の意識とエネルギーは定着しつつある」。したがって保守も革新も、たとえその対置図式が風化しようとも、「この国民大衆の意識とエネルギーを尊重し体现することなしには、その存在を確保しその勢力を拡大することはできない」のである。

佐藤首相の夢

一九六九年秋の時点で、私は佐藤首相の所信表明の中に、「自主防衛」と「経済援助」を二本の柱として「アジアの主役—日本」をめざす政治目標を読み取り、「戦後四半世紀を経過しようとするいま、国力の発展充実、日本資本主義の成熟、国民意識の変化などの諸要素は、まさに戦後政治の総決算と新たな政治局面の展開を迫っていると思われる」(同書、三ページ)との認識を示した。

しかし、一九八二年秋、就任早々の中曽根首相がはじめて公然と「戦後政治の総決算」を掲げたのは、この指摘から実に一三年後のことであった。では、この一三年間は何であったのか。佐藤首相の「アジアの主役—日本」の夢は、その政権の後半、ドルと中国とのニクソンの二大ショックによって尻つぼみとなり、佐藤首相の名はむしろ、平和憲法の延長線上にある「非核三原則」確立を評価したノーベル平和賞受賞の榮譽で飾られることとなった。一種の歴史の皮肉といえようか。

「戦後政治の総決算」

佐藤後の一〇年間はいわゆる「三角大福鈴」による「繕いの時代」であった。日中国交正常化から日中平和友好条約締結へ、二度にわたるオイル・ショック、狂乱物価・経済不況・赤字財政、ベトナム戦争の終結、金権政治とロッキード事件、与野党伯仲から八〇年同日選挙大勝へ、めまぐるしい変化と動揺と迂回の一〇年間であった。

そのあげく中曽根首相が登場し、「戦後政治の総決算」路線を打ち出した。当初それは、「日米運命共同体」「日本列島不沈空母論」(ともに八三年一月の日米首脳会談時の発言)など、どぎつい軍事大国志向を意味したが、世論の批判を受けてやや内政重視、行財政改革志向に重点を移し、世論の支持を回復していった。しかし、シーレーン防衛の共同作戦研究の合意、SDI(戦略防衛構想)研究参加、防衛費のGNP(国民総生産)比1%枠突破など、軍事面の能力増強は着実に進められた。中曽根自身の表現によれば、それは次の通りである。

「首相の重責を担って以来、戦後政治の総決算を標榜し、対外的には世界の平和と繁栄に積極的に貢献する国際国家日本の実現を、国内的には二一世紀に向けたたくましい文化と福祉の国づくりを目指して、全力を傾けてきた」(八五年一月、施政方針演説)

その後も中曽根政権は、国鉄の分割・民営化、教育改革などを進めたが、売上税導入は失敗し、地価急騰の批判を受けるなかで政権の幕を閉じた。

四半世紀の歩み

この中曽根政治の五年間は何であったのか。戦後日本の保守政治のなかでいかなる歴史的位置を占めるのか。それは本書の大きなテーマの一つである。

佐藤政権七年八カ月によって、「戦後日本の保守政治」は頂上を極めて完成し爛熟した。そのプラスとマイナスの遺産を継承して、「三角大福鈴」五代による一〇年余の迂回と繕い

の政治があった。この一〇年余のあとに中曽根政権が登場し、久しぶりに長期五年の命脈を保った。この佐藤・中曽根の両政権は、一種のあざやかな照応を示している。六九年当時、佐藤は「アジアの主役・日本」をめざしたが、その目標は七〇年代の迂回を余儀なくされた。しかし二〇年を経た八九年のいまは、中曽根をして「世界の中の日本」を呼号させ、竹下をして「世界に貢献する日本」を自負させるに至った。この変化は、いうまでもなく日本の経済力の比類ない発展と充実によるものである。その間、政治はどのような役割を果たしたのか。本書は、佐藤政権以後四半世紀の政治の歩みを検証するとともに、それらを通じて「現代日本の保守政治」の特質を明らかにしようとするものである。

第一章

佐藤長期政権の明暗

國際情勢と
右派の期待

前著『戦後日本の保守政治』の末尾の部分で、筆者は佐藤栄作政権の性格と歴史的位を次のように規定した。少し長くなるが、引用して本書への導入部としておきたい。

「一九六四年一月九日、佐藤栄作は第五代自民党総裁に指名され、即日、佐藤政権が発足した。……同じ六四年秋、世界政治はいくつかの重大な転機を経験した。アメリカではすでに一年前の六三年十一月、ケネディ大統領暗殺の激動があり、一年後のこの秋、継承者のジョンソン大統領が再選された。ソ連では、一〇月一五日、フルシチョフ首相が解任され、コスイギン首相―ブレジネフ共産党第一書記ラインが確立した。その翌一〇月一六日、中国は初の核実験に成功して全世界に衝撃を与えた。またイギリスでも一〇月一五日の総選挙で労働党が勝ち、一七日、ウィルソン内閣が成立していた」

「こうした國際情勢のなかに発足した佐藤政権は、複雑な性格を背負っていた。それはまず第一に、同年七月の総裁選挙では池田から政権を奪取しようとしてはげしく争いながら、同年一月には同じ池田政権から話し合いで政権を受けたことから生じた。第二には、佐藤首相自身が、吉田元首相の直系として池田前首相と政治的兄弟の關係にありながら、同時に岸元首相